

抑制から文化へ：  
映像メディアに見るイルカ漁のメディアフレームとその変遷  
Pest Control to Culture:  
The Development of Dolphin Hunt Media Frames in Film

アラバスター ジェイ<sup>1</sup>  
Jay ALABASTER

<sup>1</sup>アリゾナ州立大学大学院ジャーナリズム・マスコミ研究科博士後期課程  
Graduate School of Journalism and Mass Communication, Arizona State University

**要旨**・・・戦後から現在までおよそ70年間に制作・発表された日米の主要映像を対象とし、その中に描かれる「イルカ漁」の視覚的描写におけるメディアフレームの変遷を考察する。具体的な資料としては、アカデミー賞受賞作品『ザ・コーヴ』（2009）や米国の人気テレビ番組『フリッパー』（1963）、NHK映像作品『クジラと生きる』（2011）を含む、イルカ漁描写のある日米主要映像作品18編を取り上げ、文化的文脈の中でのイルカ漁の描写に焦点を絞り、結果5つのフレームを特定した。結果としてイルカ漁に関わるフレームが、その背後にある人々の意識の変化と共に変遷してきたことが確認される。

**キーワード** イルカ、イルカ漁、太地町、映像メディア、メディアフレーム

## 1. はじめに

日本でも米国においてもイルカは人気のある広く認知された動物である。そしてそのイルカを代表するのがバンドウイルカだ。「カリスマ性のある巨型動物」(charismatic megafauna)とはその可愛らしさなどで大衆を魅了し、人間から特別な注目と扱いを受ける一連の動物のことを指すが、バンドウイルカは過去半世紀でまさにその典型となった。シロナガスクジラやアメリカアカオオカミ、コアラやオオカンガルーといったこの部類の動物と同様に、イルカは他のより絶滅を危惧される動物よりもはるかに手厚く法律や政令で保護されている (Barney et al.)。

このような中、野生イルカをどのように扱うかに関しては日本と米国などの欧米諸国で大きく対応が異なり、摩擦を生むほどになっている。日本では一定数の自治体が食肉用として、また水族館等への生体販売のため野生イルカを積極的に捕獲している。こういった活動は米国では抗議活動家によっても政府レベルにおいても強い批判を浴びているが、一方日本においてはイルカ漁は国内の活動家や政府関係者、政治家によって擁護されている。

この論争の最も著名な例が和歌山県太地町のイルカ漁を痛烈に批判した米国のドキュメンタリー映画『ザ・コーヴ』（2009）だ。同作品は海外では賞賛を集め、アカデミー賞の受賞にまで至ったが、日本国内では偏った内容や隠しカメラを使った手法などが広く批判された。

これまで日米の新聞報道を中心に、各国の様々な報道記事における「太地町」や「イルカ漁」などのキーワードがどのように表現されるかを調査してきたが、一つの結果として欧米の報道では、「イルカ漁」はより大きな環境保護運動と動物愛護運動との繋がりを通して語られていることを確認している (Alabaster, 2017)。これを踏まえ、新聞報道に限定せずより広い範囲での「イルカ漁の概念」と描写の調査と分析が必要であると考えた。

古くから、多くのイルカ漁関連の報道は、動物と漁師の決闘シーンや、イルカ畜殺の際の血に染まった海など、視覚に訴える映像が好んで用いられることから、この調査の第一段階としては、映像メディアの調査がふさわしいと考えた。本研究では特に日米の主要ドキュメンタリー映画に焦点を絞り、映像メディアから抽出されるイルカ漁のメディアフレームとその変遷を明らかにしたい。

## 2. 研究目的と意義

これまで『ザ・コーヴ』や他の動物関連の映像作品が個別に分析されたことはあるが (Molloy, 2011; Newman, 2015)、イルカ漁の描写を中心にした研究はなされておらず、本研究はその溝を埋めるべく行うものである。イルカ漁は近代の様々なドキュメンタリーおよびフィクション作品のテーマとして取り上げられてきた。本研究では対象とする作品を観察・比較することで、イルカ漁の描写の下に横たわるフレームを特定し、戦後の日米におけるイルカ漁に対する考え方とその変化・変遷を分析する。

現在、一般社会における自然界への懸念は高まっており、様々な動物、特にイルカのような大衆に愛される動物をめぐる異なる意見が激しく対立している状況がある。日本のイルカ漁のテーマも感情的で論争的な議論になりがちである。本研究ではイルカ漁が現代の映画やドキュメンタリー作品の中でどのように描写されているかを調査し、各作品の制作に用いられたイルカ漁描写の主要フレームを特定することで、その議論のための一つの合理的な枠組みを提示したいと考える。

## 3. 分析

第二次世界大戦後から2018年にかけて日本と米国で制作・公開されたドキュメンタリー及び創作映画18編を分析対象とした。ここには活動家の顕著なイデオロギーを表現するものとしてソーシャルメディアに投稿された動画も含めた。作品選択にあたっての主な条件は、広く一般に公開されたものであり、イルカ漁あるいはイルカの捕獲が作品のプロットにおいて重要な位置を占めること、さらに基本的には一時的な速報ニュースなどではなく、一定の期間鑑賞される目的で作られた作品であることである。

分析の結果、次の5つのメディアフレームが特定された。各フレームとそのフレームが抽出された代表作品は以下に示す通りである。中には複数のフレームを持つ作品もある。

### (1)「珍しい漁」のフレーム

これはイルカ漁を「珍しい、注目に値する営み」として描くフレームである。特定の場所や漁師グループと繋げて提示されることが多い。本研究で確認された例の多くが肯定的、あるいは中立的な性質のものであった。実際にイルカ漁は世界的にも珍しい行為であることからイルカ漁の描写のほとんどがこのフレームに当てはまるとも言えるかもしれない。しかしこのフレームで例にあげる映像作品は、イルカ漁を興味深く一般的ではない出来事として強調するものである。「珍しい漁」の初期の一例として、NHKテレビ番組『ごんどう鯨生捕り』(1951)の中でイルカ漁について言及したものがある。イルカ屠殺のシーンは明るいBGMと共に流れ、女性アナウンサーが捕獲されるイルカの頭数や一頭あたりの価格についてなど、漁に関する興味深い事実を伝えている。この他、日本の外務省が海外広報のために作った映像『Dolphin Roundup』(1961)がこのフレームを用いている。

### (2)「抑制」のフレーム

これはイルカの妨害から「他の漁業を保護するために必要な営み」としてのフレームだ。イルカは優秀な海ハンターであり、実際に漁師の釣り糸や網から魚を横取りすることを学ぶ例がたくさんある。こういった理由から、イルカは漁師にとって見つけたならばその場で殺すことを選択する者もいるほど「敵」や「競争相手」として認識されてきた。

60年代の米国で高い人気を博し、多くのリメイク作品が作られた映画で、テレビドラマ化もされた『フリッパー』(1963)は、イルカを友好的な人間の仲間として描くものだが、それでも主人公の父親に「イルカは他の漁業を妨害するので、殺さざるを得ない」と語らせている。この映画のテーマの一つは人々とイルカが食物を取り合う問題が、皆の腹を満たすのに十分な魚の供給があった時にのみ解決するというもので、魚が不足した時にどうなるのかの疑問に答えを示すことはない。

このフレームには日本でも欧米でも事実に基づく歴史的背景があるにも関わらず、現代のイルカ保護活動家は度々これを嘲笑的にする。欧米的思考では「魚を捕ることに干渉するからイルカを殺す」という考え方はほぼありえないものであり、これは彼らが作るイルカ漁反対のビデオ映像でよく取り上げられる見解である。

### (3)「環境問題」のフレーム

クジラの身は脂肪が多く機械油やランプ油のために19世紀～20世紀に多くの種が絶滅危惧に至るまで捕獲され、国際的な保護の声が高まって現代の環境保護運動に拍車をかけた。この運動はのちにイルカ保護運動へと繋がっていく。イルカには生理学的な類似点をはじめクジラとの共通点が多くあるが、ほとんどのイルカの種は絶滅危惧ではないにも関わらず、このフレームは捕獲しすぎることによってイルカが消滅する可能性のあることを強調するものだ。またこのフレームは公害や乱獲といった他の生態学的災害にも関連づけられている。

アカデミー賞を受賞した米国のドキュメンタリー映画『ザ・コーヴ』(2010)では、太地町のイルカ漁を「自然災害」と呼

んでいる。イルカ絶滅の恐れを引き合いに出し、イルカを殺すことは海洋環境にとって害であり、汚染問題や捕鯨問題といった他の環境問題にも繋がると提示している。また同作品は、イルカ漁を水銀の害毒や世界規模での絶滅器具に関連づけている。この以前から、多くのイルカ保護団体や活動家が作成する映像にはこのフレームが採用されている。

#### (4)「動物権利」のフレーム

イルカを人間に匹敵する知性とコミュニケーション能力を持つ動物として位置付けるフレームである。イルカの脳が大きく、自然界で頻繁にコミュニケーションをとることを示す研究結果もあり、実際の能力の程度については未だ議論の余地もある。極端の考えでは、イルカには知性や自己認識力があるのだから、人間同様の権利を与えられるべきであるとする。

このフレームを強調するドキュメンタリーや創作映画はイルカを人間と同等の知能と感情を持つ生き物として描いている。シャチが人間のように精神病に苦しむ姿を描いた『ブラックフィッシュ』(2013)に代表されるように、現代にも同じ考え方が継承されている。本作品は米国で非常に大きな影響を及ぼしている映画で、イルカやシャチを水槽に閉じ込めることに対する強い反発を引き起こした。

#### (5)「文化・伝統」のフレーム

近年、現代のイルカ漁を歴史的な「文化・伝統」の中で肯定的に捉えるフレームが登場している。このフレームの多くは上述の否定的フレームに反発するものとして出現しているが、否定的フレームが根拠とする環境問題やイルカの知性などの主張に関して特に議論をしていない。

NHKドキュメンタリー番組『クジラと生きる』(2011)及び、ドキュメンタリー映画『おクジラさま』(2017)は太地町のイルカ漁を町の捕鯨の歴史の延長線上にあるものとして、誇り高い漁師や、イルカ肉を食べる家族の姿を描いた。ドキュメンタリー映画『ビハインド・ザ・コーヴ』(2015)はイルカ漁への国際的批判を、日本の捕鯨の歴史と文化を軽んじる反捕鯨運動の一部として位置づけている。

## 4. 考察

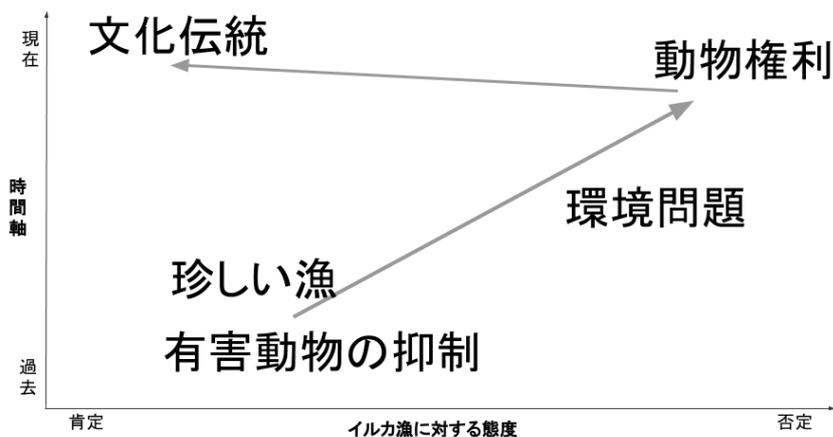


図1 日米の映像が利用するイルカ漁のフレーム

分析結果として、イルカ漁をめぐるメディアフレームには概ね図1のような変遷が確認された。つまり、戦後間もない時期の映画やドキュメンタリー映像におけるメディアフレームはイルカ漁に対し特に否定的ではなく、様々な漁形態の中で、イルカ漁も存在するとの認識に立っていたと考えられる。しかし70年代以降、絶滅危惧クジラの保護運動などの一貫として「自然保全のためのイルカ保護」の必要性が訴えられるようになり、イルカ漁を否定するフレームが用いられるようになった。そして近年ではさらに利用されるフレームが変化し、人間並みに知能の高い動物としての「イルカの権利」が強調されるようになってきている。これと同時に「環境問題」と「動物権利」のフレームに反発する形で、イルカ漁を国や土地固有の守るべき「文化・伝統」として捉える動きが高まっている。

## 5. おわりに

イルカ漁は単なる論争のテーマというだけでなく、漁の現場からインターネット空間、政治レベルにまで影響を及ぼすものだ。

和歌山県太地町のイルカ漁はその代表的な例である。特に2009年に『ザ・コーヴ』が公開されて以降、太地町には海外からの活動家が押し寄せた。太地町の漁期が始まる毎年9月1日を「日本イルカの日」などと呼び世界中で反イルカ漁のデモが行われる。同町では現在も外国人活動家が地元追い込み漁をビデオや写真に撮りメディアで拡散する活動を続け、それを地元警察と県警が24時間体制で監視している状況だ。一部の活動家は日本政府にテロ指定をされ入国拒否をされている。また、毎年追い込み漁シーズンの初日には外国人活動家が反対を訴えるかたわらで、右翼系団体が浜辺に集まり日の丸を掲げての講演会と鯨肉バーベキューをするといった光景がある。

2014年にはケネディ元駐日米国大使が太地町のイルカ追い込み漁を批判するツイート②を投稿して話題になった。一週間後、これに反論する形で安倍首相はイルカ漁は古来から続く文化であり、慣習として理解してほしいとする考えを述べた。③イルカ漁問題は国家レベルでの対話のみならず、民間・個人レベルでも意見や立場の異なる者同士の対話や理解が難しいのが現状であり、特に人々の感情に訴えるイルカをめぐる問題は解決が容易ではない。メディアフレームを発見することで、物議をかもし論争をより学術的・分析的・批判的に理解し、議論することが可能となる (Reese, 2007)。本研究で示したフレームはイルカ漁に関するこれまでの感情的衝突による単なる賛成・反対の表明ではなく、より論理的で深い議論を進めるための枠組みとなり得ると考える。

## 補注

<sup>1</sup> 「イルカ」と「クジラ」を分類する方法は一般的に複数存在する。最も一般的な分類は大きさによる分類で、専門知識を持たない者にとっては小型クジラとイルカの区別は難しい。また時にはハナゴンドウクジラ (英語では *Risso's dolphin*) の例のように、日本語ではクジラと認識されているものが英語ではイルカと認識されている場合もある。

<sup>2</sup> 2014年1月18日自身の公式ツイッターで「米国政府はイルカの追い込み漁に反対します。イルカが殺される追い込み漁の非人道性について深く懸念しています」と発言。 <https://twitter.com/ambckennedy/status/424405149730107393>

<sup>3</sup> 2014年1月24日CNNのインタビューに答えて。「太地町におけるイルカ漁については、古来から続いている漁であって、彼らは彼らの文化であり慣習として、また生活のためにとっているのだということを理解してもらいたい。それぞれの国には、またそれぞれの地域には、それぞれ祖先から伝わる様々な生き方、慣習というものがある。文化もある。私は当然そうしたものは尊重されるべきものだと思っているが、同時に様々な批判があることも承知をしている。」漁の仕方については、「相当な工夫がなされているという風に聞いている。この漁についても、あるいは漁獲方法についても、厳格に管理されている」と述べた。 <https://www.cnn.co.jp/world/35043008.html>

## 参考文献

- 1) Barney E., Mintzes J., & Yen C. (2005): Assessing knowledge, attitudes, and behavior toward charismatic megafauna: The case of dolphins. *The Journal of Environmental Education*, 36(2), 41-55.
- 2) Alabaster, J. (2017): News coverage of taiji's dolphin hunts: media framing and the birth of a global prohibition regime. *Asian Journal of Journalism and Media Studies*, 1.
- 3) Molloy, C. (2011): *Popular Media and Animals*, London: Palgrave Macmillan.
- 4) Newman, L. (2015): The effects of the cove and bold native on audience attitudes towards animals. *Animal Studies Journal*, 4(1), 77-98.
- 5) Reese S. (2007): The framing project: a bridging model for media research revisited. *Journal of Communication*, 57(1), 148-154.